



福島県各地に、全国から様々な形の応援が寄せられています！ そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えします。

福島へのラブレター



医師・作家
鎌田 實さん
(長野県在住)

福島にかかわりはじめたのは、大震災と福島原発の事故で、孤立する30キロ圏内からのSOSを受けたことがきっかけでした。諏訪中央病院の医師や看護師による医療班とともに活動。また、ぼくが代表をしている日本チェルノブイリ連帯基金では、チェルノブイリ救援活動の経験を活かし、福島支援を続けています。柳田邦男さんと一緒に子どもたちに絵本の読み聞かせをしたり、ピーコさんやさだまさしさんとともに慰問にも行きました。1月25日、福島市の音楽堂で永六輔さんとの講演会も予定しています。もちろん、すべてボランティアです。福島に通いながら、福島が第二の故郷みたいになりました。親戚のような仲間がたくさんできました。これからも聴診器をもって巡回診療に入ります。見かけたら声をかけてください。福島、大好き。



女優・しゃくなげ大使
三田 佳子さん
(東京都在住)

東北の皆さんを語る時、誰もが豊かで厳しい自然に接してきたからこそ「がまん強さ」をあげます。縁あって、福島や青森の皆さんと長年交流を重ねてきた私には、違和感の無いストレートな印象でした。しかしあの日から、それはそんな単純な言葉では表しきれない、日本人が本来持っていた精神性や品格の様なものなのだと強く実感しています。ことに原発事故と風評被害を受け、三重苦とも四重苦とも言われる逆境にある福島の皆さんが、助け合い、支えあって復興や生活再建に向けて歩む姿を見るにつけ、むしろ私の方が生きる勇気や力を分けて頂いている気がします。皆さんの長い道のりに、私も微力ながら一緒に続けるつもりです。訪れる新年が、皆さまにとって爽やかな年になる事を祈って。

リレーエッセイ

ブータン国王の祈り

作家・福聚寺住職 玄侑 宗久

11月18日、日本の皇室に招かれて訪問中だったブータン国王ご夫妻が、被災地である相馬市を訪れた。相馬市での滞在はわずかに90分ではあったが、そこで示された足跡はとても大きかったと思う。

相馬市長の立谷氏によれば、訪問時間の前半を過ごされた桜丘小学校では、生徒たちの歌を聞いたあと、「あなたの心のなかにいる龍を鍛えてよ」と子どもたちに告げたという。その言葉は国王自身の信条でもあるらしいのだが、なんと含蓄のある言葉だ。

さらに国王陛下ご夫妻は、立谷市長の案内で松川浦漁港、尾浜海水浴場など、津波で以前とは変貌してしまった場所を訪ね、市長の説明を受け、漁師たちの奥さん方を励まし、そしてお国から同道してこられた僧侶3人と共に祈りを捧げてくださった。ありがたいことだ。

それにしても、ご夫妻の訪問について思うのは、こうした訪問が、最近の日本では用件とは思われていないだろうということだ。

何のためにお出でになったのか、というと、感謝し、励まし、祈るためだったとしか言いようがない。むしろ、感謝というのは、かつて海外青年協力隊員としてブータンを訪れ、その後もブータンに留まって農業指導などに尽力し、その地に没した西岡京治さんあってのことに違いない。

しかし現代の日本社会で、商売にも関係せず、約束があったわけでもないこのような用件が、はたして用件として通用しているだろうか。都市にはすでになくなってしまった考え方のような気がする。

幸いにも、我々の東北地方にはまだそれが残っている。3時にはお茶に集まり、夜は夜でワケもなくお酒を飲み交わす。彼らも本当は、感謝しあい、励ましあっていっているのではないかと……。

また東北地方には、各地に隣組のような自治組織がいまだに残っている。普段は面倒なことも多いものだが、それがイザとなれば「絆」として機能する。「きづな」とは元々馬をつなぐ綱のことだから、普段は煩わしいのが当たり前ののだ。

これから仮設住宅には、未経験の冬がやってくる。どうかお互い、感謝し、祈り、励まし、心のなかの龍を鍛えながら今年の寒い冬を乗り切っていただきたい。きっと龍とは、自分でも知らなかった強い生命力のことだ。

【プロフィール】 玄侑 宗久(げんゆう そうきゅう)
1956年生まれ。三春町在住。作家・福聚寺住職。政府の東日本大震災復興構想会議委員。

こんにちは、生活支援相談員です！

須賀川市社会福祉協議会

震災から9カ月が過ぎ、復興に向けての取り組みも懸命に進められているところです。私たち須賀川市社協では、10月で生活支援相談員(4人)がそろいました。これからも、引き続き皆さんといっしょに復興にむけて頑張っていきたいと思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。今回は、私たちの日頃の活動メッセージを送ります。

○時間は刻一刻と過ぎてゆくなか、復興は目に見えて進んでいますが、被災者のメンタル的ケア(心のケア)は目に見えない分、慎重かつ継続的に進めていかなければならないと思います。原発事故の不安や今後の生活不安は尽きませんが、できるだけ同目線、同方向、そして同思考を基本に支援活動を展開してまいります。 By 吉田

○日頃の活動を通して、助け合いの力の大切さをあらためて感じています。特に台風15号の床上浸水被害(市内1カ所の仮設)により、再び避難生活へ…そんな中でも住人同士の助け合いの姿や、笑顔で迎えてくださる方々から、支援活動を頑張ろうという気持ちをたくさんいただいています。今後も、皆様のお力になれるよう元気に活動してまいります。 By 吉川

○支援活動を通して、様々な困難とぶつかりあい、どのように支援して行ったらいいのか、これでいいのか、ほとんどが手探り状態でした。不安な気持ちの中での支援活動でしたが、「ありがとう」のこぼれ

に救われています。これからも、被災者に寄り添った活動を続けて行きます。 By 竹村

○震災、水害と被害が続き、避難所暮らしを余儀なくされた方々から、ストレスや人間関係のトラブル等で、誰にも話せなかったことを、「やっとあなたに話せたわ…」と涙ながらに話された時、生活支援相談員になってよかったと実感しました。精神的な安らぎ、安心した生活を送る応援が、私の役割だと思えました。支援活動において、一つ一つが勉強になります。 By 佐藤



左から 吉田裕司・吉川寛子・竹村妙子・佐藤真弓

Special Message

新潟県柏崎市で被災者支援にあたって訪問支援員より

見守りケアスタッフの仕事始めて

柏崎市被災者サポートセンターあまやどり訪問支援員 猪狩てるみ

東日本大震災後、福島県南相馬市から新潟県柏崎市へ避難し9カ月が経過しました。現在は柏崎市にある「被災者サポートセンター あまやどり」で被災者、避難者の方の見守りケアスタッフとして活動しております。

この活動を始めたきっかけは、被災者のために自分にできることはないか、何か力になりたいという想いからでした。活動する中で震災当時の状況や現在の心境、被災者それぞれが抱える悩みに触れ、話をすることで少しでも心が楽になっていただけたらと思っております。

最初の頃は緊張でうまく会話が出来ず、私に務まるのだろうかと不安に思ったこともありましたが、

今では顔を覚えていただき、「来てくれるのを待ってたよ」「頼りにしてるね」といった言葉を掛けてくださる方もいらっしゃいます。こういった言葉を聞くたびに支援する側の私の方が逆に元気をいただいております。

これから本格的な冬の季節がやってきます。NPOやボランティア等の皆様も避難者の心情や要望等を十分ご理解していただき、これからも続く避難生活に末永い支援をお願いできればと思います。

人は一人では生きていけません。知らない土地、慣れない環境だからこそ助け合い、喜び合い、絆を深めながら無理をせず、頑張りすぎず、手と手を取り合っていきたいと思っております。

編集後記

これからの年末年始。クリスマス、大掃除、正月の飾りつけ、初詣。複雑な気持ちになるときもありますよね。気持ちに無理をしないで、新しい年を迎えられればいいな。(中島将)

最新情報はホームページで
ご覧ください!
<http://www.pref-f-svc.org>



がんばろう、福島。

次号は来年1月16日発行です。